

ありがとう、救急車

桐生厚生総合病院は県内に七つある地域周産期母子医療センターに指定されています。地域周産期母子医療センターとは産科・小児科（新生児）を備え、比較的高度な周産期医療を担う医療機関を指します。妊娠22週0日以降妊娠36週6日までの間に分娩になってしまう場合を早産といいます。原因はさまざまありますが、切迫早産の重症化、前期破水などのように陣痛が早く来ってしまう場合と、妊娠高血圧症候群のように、妊娠を維持すること自体胎児と母体の危険につながるため妊娠を終了せざるを得ない場合があります。早産で最も問題になるのは、早く生まれた赤ちゃんには新生児集中治療室で専用の医療が必要な点です。早産になりそうなときは、母体搬送といって、桐生医療圏内、ときには県央以西から妊婦さんを救急車で運んでもらっています。逆に当院から県央の病院へ妊婦さんを救急車で運んでもらうことがあります。つまり、周産期医療は救急隊の出動があつて初めて成り立っているのです。

この3年間、新型コロナウイルス感染症の蔓延で周産期医療も大きな影響を受けました。当院では感染した妊婦さんの分娩をするのに施設設備が不十分であったため、救急車で運んでもらったこともありました。当時、まだ新型コロナウイルス感染症の全貌が不明で、肺炎を発症する人も多く、救急車に同乗した私は、恥ずかしながら感染に対する恐怖を感じていました。しかしそのような状況でも、救急隊員の方たちは感染対策をしつついつもとかわりなく妊婦さんの脈や血圧を測り、話しかけて励ましてくれました。そして無事妊婦さんは目的地の医療施設まで到着することができました。以前からの感謝の気持ちに加えてこのときは、自身の危険も承知しながら任務を果たす使命感に更に強い感銘を受けました。本当の勇敢さを見た気がしました。いつか、御礼を申し上げたいと思っていました。本来、このコラムでお伝えすることとは違うかもしれませんが、今いちばん言いたいことをいいます。ますます厳しい救急状況のなか、母体搬送に出動していただいているおかげで、多数の赤ちゃん、お母さんが助かっています。救急隊の皆様、いつも本当にありがとうございます。

【産婦人科外科診療部長 鏡 一成】

